

埴仏にみる調整痕の違いについて

——夏見廃寺出土埴仏を例に——

中 東 洋 行

一、はじめに

埴仏は、埴面に半肉彫りの仏像を表したものである。陶製の陰刻型に粘土を押しあてて型抜きし、焼成してつくられたとみられている。埴仏に残る痕跡から判断すれば、焼成後には彩色や金箔が施されたようである^①。その作例は、主に七世紀後半から八世紀に集中するとされ、従来から美術史学において、白鳳・天平彫刻の失われた輪をつなぐ貴重な遺品として注目されてきた。

埴仏の研究は、高橋健自の研究を嚆矢とする。「**埴佛像考**」において高橋は、埴仏は埴面に半肉に仏像を表したものと定義し、飛鳥京・藤原京の時代に使用され、寺院の壁面荘嚴として用いられたものとした。また、押出仏との関係や中国石窟寺院の関係についても言及している。埴仏の出土例がまだ少ない中での高橋の研究は、今日における埴仏に対する評価と大きく異なるものではなく、その功績は高く評価できる。

この後、埴仏の研究を大きく進めたのは久野健である。久野は埴仏の凶像に注目し、埴仏出土寺院の造営年代や美術史学の視点に基づいて、橘寺、山田寺、崇福寺、當麻寺、夏見廃寺、南法華寺出土の埴仏について、その製作年代を推定した。

このように、埴仏はその凶像や用いられ方、その使用年代に対する研究が古くから盛んであった。これらの研究は、東アジアにおける埴仏の伝播や白鳳仏教において埴仏が用いられたことの意義を検討するものもあり、その解明が期待される。近年でも多くの論者が埴仏の凶像について検討しており、埴仏を通じて白鳳仏教の様相が明らかにされつつある^②。

このような東アジアからの視点に立脚した埴仏の研究が進む一方で、日本列島における埴仏の様相に主眼をおいた研究は遅れがちであった。特に、埴仏の生産体制に注目した研究は管見の限りほとんどなされていない。大脇潔の焼き縮みに注目した研究や光森正士の埴仏型に注目した研究^③などのように大きな成果をあげているものもあるが、その実態にせまるには未だ不明な点が多く残されている。

このような現状を鑑みれば、埴仏の実態をより明らかにするには、日本列島における埴仏の様相に注目した研究を進めるべきである。本稿ではその一歩として、埴仏の製作段階に焦点をあて、調整痕などからその様相を明らかにしたい。調整痕に注目した研究は、土器や瓦などにおいて大きな成果をあげている。このことから判断すれば、埴仏においても調整痕に注目した検討は十分可能だと考える。埴仏の調整痕に注目した論考は管見の限りないため、本稿において新規に観察視点を設定すると

ともに、その視点に基づき、一遺跡における埴仏作製の様相について検討したい。検討対象としては、夏見廃寺をとりあげることとする。

二、考察の対象

夏見廃寺は三重県名張市夏見に所在し、名張川の北岸にある丘陵斜面上に位置する。その伽藍配置は金堂が西に、塔が東に並び、講堂が金堂の前に配置されるという特殊なものである。出土遺物の検討などから、その造営は数次にわたって行われたと推定され、まず六百九十四年ごろに金堂が、八世紀中ごろに塔や講堂が造営されたと考えられている。このことから、夏見廃寺は統一された計画のもとに堂塔が配されたものではないとみられている。造営にあたっては、『前田家本葉師寺縁起』の記載より大来皇女との関係が推測されているが、その記載と考古遺物の年代観との間に誤差があり、その問題は解決されていない^⑦。

夏見廃寺からは四百点以上の埴仏が出土している^⑧。多くの遺跡からは埴仏が数点しか出土しないことを考えれば^⑨、この数は非常に多いといつてよい。『夏見廃寺』ではこれらの埴仏を、大形埴仏、三尊埴仏A、B、C、独尊埴仏A、B、Cに分類している。この分類は、三尊埴仏とそれ以外では分類の視点が異なる点で注意を要する。三尊埴仏以外はすべて図像による分類だが、三尊埴仏は同じ図像のものを、図像が完全に残るもの(A)、主尊部分のみを切り取るもの(B)、Aよりも一回り小さいもの(C)と分類している。

本稿においては、大形埴仏を大型方形多尊埴仏、三尊埴仏を方形三尊



図1：方形三尊埴仏の図像

埴仏、独尊埴仏を小型方形独尊埴仏と改める以外^⑩は基本的にこの分類を踏襲するものとする。

方形三尊埴仏Aは、復元で縦約二十三cm、横約十四cmをはかる。その図像は主に、葉を広げた双樹の下で蓮華座上の宣字座に倚座し、定印を結ぶ主尊と、その両脇で蓮華座上に直立し、合掌する菩薩とで構成される。主尊は、C字形の表現に囲まれた頭光と火炎で表現された身光を背負い、衲衣を偏袒右肩し、その足は二重蓮華座を踏む。脇侍は、両尊とも同じ姿で蓮華座に立ち、円形の頭光を背負い、天衣が翻るその身には、首と腰に瓔珞を纏う。両脇侍の頭上には二体の飛天が舞い、主尊の頭上には宝珠で飾られた天蓋がかかる。図像が共通するものは、東は静岡県から西は広島県に至るまでの三十一の遺跡で確認されており、比較的広

範囲での分布が認められる。¹²⁾

大型方形多尊博仏は、復元で縦横とも五十 cm を超す大きさのものである。その図像は、台座上で結跏趺坐する如来と、その両脇の蓮台に立つ菩薩を中心に構成される。三尊の左右には天部が配され、その背後に眷属が配される。如来の頭上には天蓋が広がり、その背後には菩提樹が表される。また、天蓋の左右では飛天が舞う。この博仏の下端には須弥壇が表現されており、須弥壇を区切る方形の区画の中には様々な楽器を演奏する楽人が表される。須弥壇の両端には銘文が見られ、向かって右側には「甲午年五月中」と記されている。この「甲午年」は六百九十四年にあたと考えられており、夏見廃寺の造営年代や博仏の年代を考えるうえで重要な資料とされる。図像が共通する博仏は、今日の近畿地方でしか確認されておらず、その分布は比較的狭い範囲に限られる。¹³⁾

これら以外の博仏については、そのほとんどが他の遺跡から出土が確認されておらず、わずかながら小型独尊博仏 B が奈良県と三重県で一箇所ずつ確認されている。¹⁴⁾ これらのことから、夏見廃寺の博仏は全国的に分布するもの、ほぼ畿内の範囲内でのみ用いられたもの、夏見廃寺とその周辺でのみ用いられた独自要素の強いものの3種類が使用されたといえる。このように夏見廃寺は、博仏が多く出土しており、その図像が共通する博仏の分布には、異なる様相が看取できる遺跡である。このことから、博仏の分布や日本列島における展開について考えるうえで重要な遺跡だと判断でき、本稿で取り上げる対象とした。

なお、夏見廃寺から出土した博仏のうち、最も多いのは方形三尊博仏 A である。そのため、検討の方法としてまずは方形三尊博仏 A に注目し

て検討を行い、その後、他の博仏の様相についてみることにする。

三、分類の視点

調整痕や製作技法によって観察視点を定め、夏見廃寺出土方形三尊博仏 A について分類・検討を加えたい。本稿で分類の対象とする資料は、実見調査できた二十六点の破片資料のうち、側面や裏面が残存する十四点とする。観察視点は、今後他の遺跡から出土した博仏とも対比できるように、側面、裏面、破断面（胎土の詰め込み方）ごとに、想定できる調整痕によって定めるものとする。以下にその判断基準とする視点を列挙したい。

【側面】

側面については、その形状と調整方法の二つに注目し、それぞれに観察視点を定める。側面の形状は、表面と側面とで構成される角度に注目する。これは、博仏陰刻型の形状や調整の様相を考える上で重要な指標と考えるためである。次の通りの分類とする。

- 1、表面と側面とで構成される角がほぼ直角をなす。
- 2、表面と側面とで構成される角が明らかに鋭角をなす。
- 3、表面と側面とで構成される角が明らかに鈍角をなす。
- 4、側面が丸みを帯びて膨らむ。
- 5、側面がやくぼんだ形状を呈す。
- 6、不整形であり、場所によって側面の状態が一樣でない。

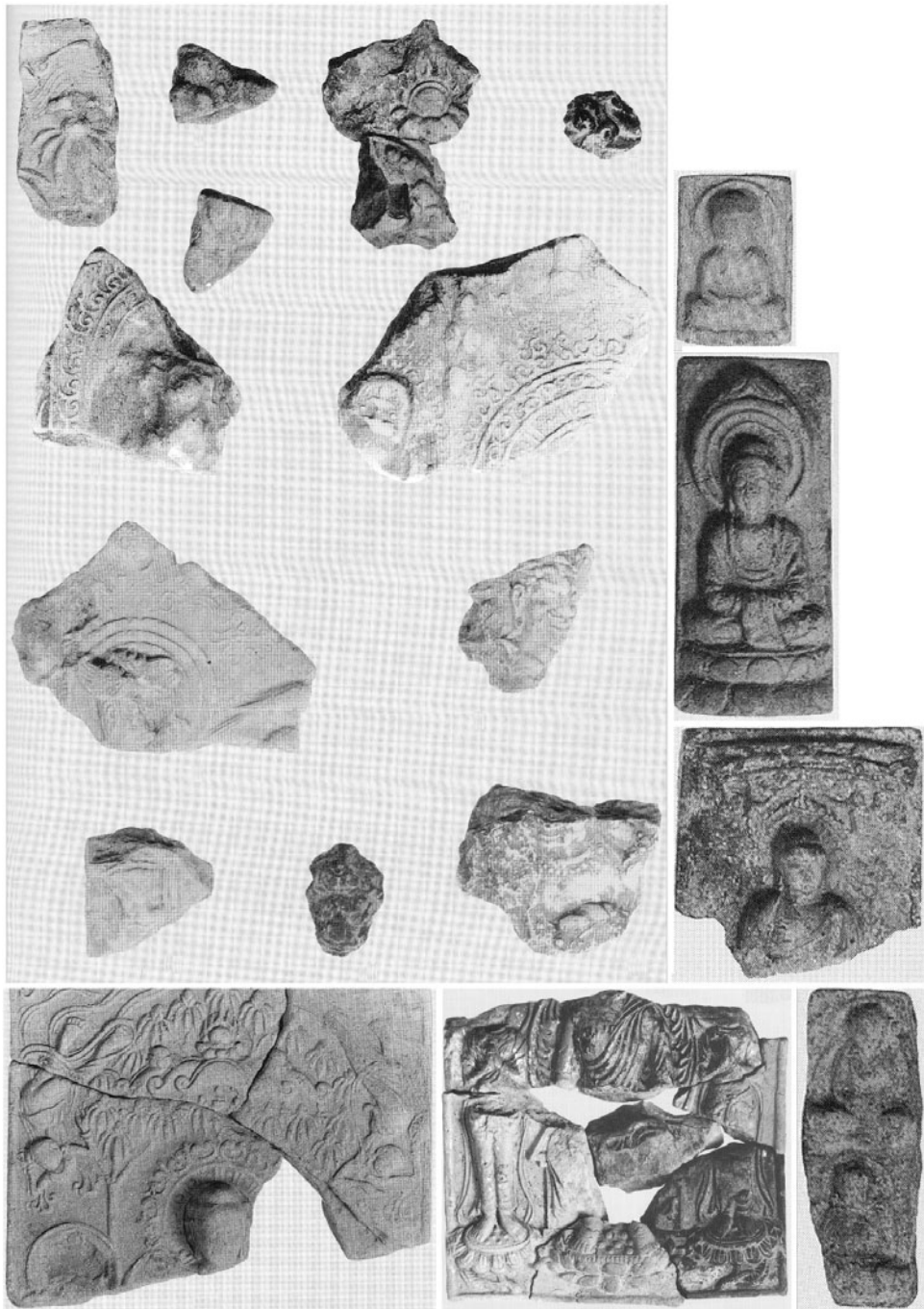


图 2：夏見庵寺出土磚仏一覽（縮尺不同）

調整方法による分類は次のとおりとする。

- i、ナデによって調整される。
- ii、ハケメによって調整される。
- iii、ケズリによって調整される。
- iv、未調整である。

【裏面】

裏面については、形状などでは大きな差異が認められない。そのため、調整方法によって観察視点を定める。

- A、ナデによって調整される。
- B、ハケメによって調整される。
- C、ケズリによって調整される。
- D、タタキによって調整される。
- E、布目が明瞭にみられる。
- F、未調整である。

【破断面】

破断面の分類については、胎土の詰め込み方によって設定する。胎土の詰め込み方は、肉眼で観察できる亀裂や胎土の様相によって判断している。観察視点は次のとおりとする。

- 一、塼面側面を形成するためだけの粘土層がある。（側面に沿って、別途粘土を詰めた痕跡がある。）

二、塼面裏面を形成する粘土層一層が、塼面側面を形成する。（側面付近で、塼面の粘土層が裏面方向にのびる。）

三、塼面裏面を形成する粘土層複数層が、塼面側面を形成する。（おおよそ均一の厚さで、塼面に粘土が詰められる。）

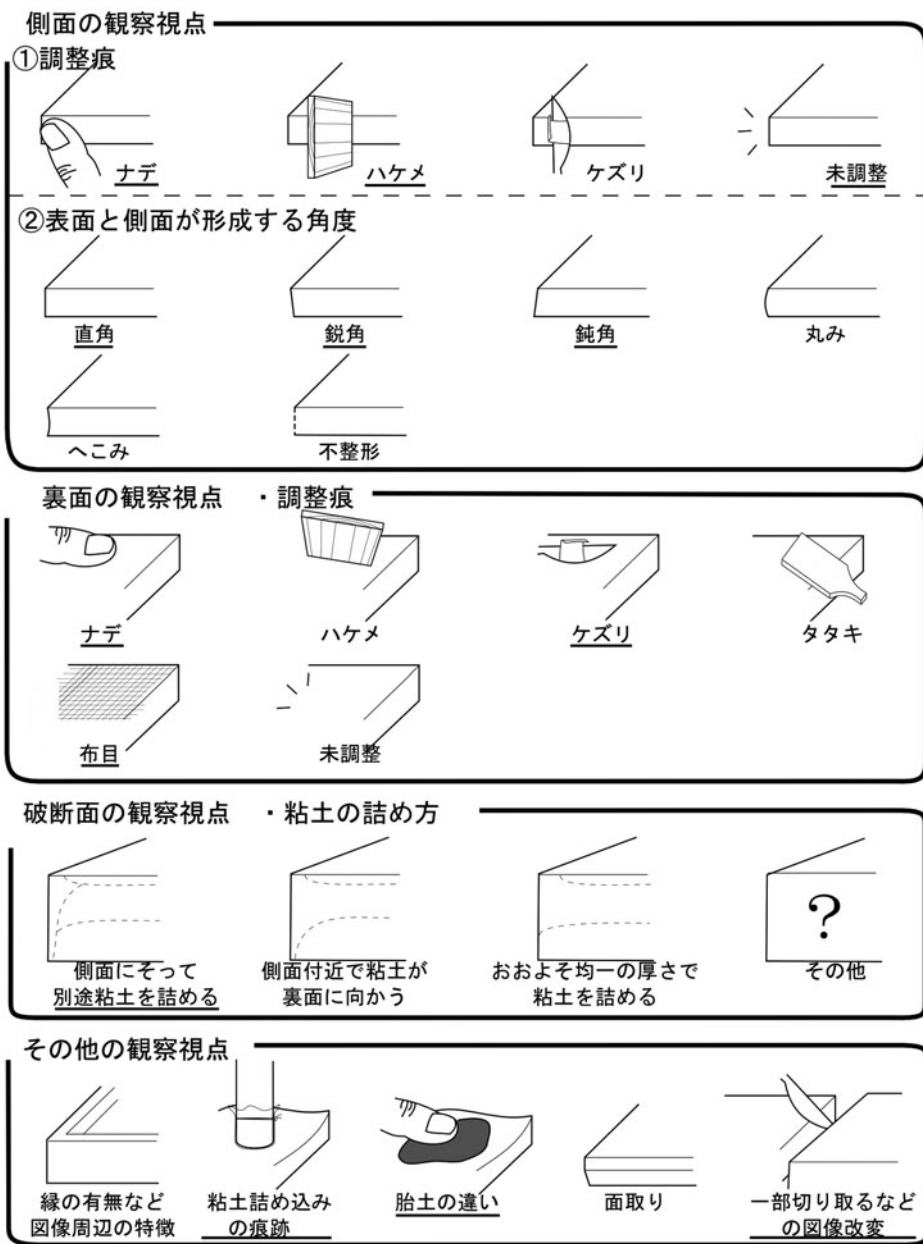
四、その他、一〜三と異なる様相である。

なお、調整痕以外の点で特筆すべき点がある場合には、必要に応じて追記することとした。これらの観察視点をまとめたものが図3である。

なお、図3に示した観察視点のうち、夏見廃寺出土塼仏にみられるものには下線をひいている。また、この視点に基づいて夏見廃寺出土方形三尊塼仏Aを分類したものを表1にまとめた。

四、製作集団に関する検討

『夏見廃寺』では、夏見廃寺から百四十点の方形三尊塼仏^⑧が出土したと報告されている。今回分類を試みた点数が十四点であることを考えれば、本検討を以て夏見廃寺全体の実態を明らかにしたというには、点数が少ないという問題がある。しかし、夏見廃寺から出土した方形三尊塼仏Aは、側面が残るものが四十五点、裏面が残るものが二十四点に過ぎないことを考えれば^⑨、おおよその傾向を把握するには十分有効なデータであると考ええる。なお、本データ作成にあたり検討した資料は、特に側面に付いてのデータを事前に把握できていない状況で選択している。そのため、選択した資料群は比較的偏りのない資料と考えている。これらのデータ



※図はイメージであり、製作過程の実体を復元したものではない。
 ※図中で下線のあるものは、夏見廃寺出土埴仏で確認できるもの。

図3：埴仏の観察視点一覧

番号	側面			角度			裏面			破断面				その他	色調
	ナデ	ハケ	末調	直角	鋭角	鈍角	ナデ	ケズ	布目	1	2	3	4		
1														詰め込み面に布目	乳白色
2															黒色
3														2種類の胎土使用	橙色・黒色
4															黒色
5															乳白色
6														詰め込み面に布目	乳白色
7															橙色・黒色
9														詰め込み面に布目	乳白色
10															乳白色
11														2種類の胎土使用	黒色
12															黒色
13														詰め込み面に布目	乳白色
14														詰め込み面に布目	乳白色
15															乳白色

1:側面に沿って別述粘土が詰められる 2:側面付近で粘土が裏面側に伸びる 3:おおよそ均一の厚さで粘土を詰める 4:その他

表1:夏見廃寺出土方形三尊埴仏Aの分類

をもとに、埴仏の製作集団の様相とその製作方法について考えたい。

考察するにあたり、本稿では埴仏の製作者あるいはグループを、製作集団という言葉で表したい。それは、埴仏の出土数から考える限り、埴仏の専門工人が存在したとは考えがたいためである。例えば、瓦や土器の専門工人が兼業として埴仏をつくった可能性が考えられる。また、仏師や僧といった存在が作製した可能性も考えられよう。もし、これらのいずれかが事実であれば、埴仏

「工人」という言葉では、ニュアンスに違いが生じる。埴仏がどのような存在によってつくられたのかは、今後改めてその実態を検討したい。

さて、表1をもとに埴仏の製作集団の様相について検討する。表1に注目すると、夏見廃寺出土方形三尊埴仏は、裏面の調整痕によって大きく2つのグループに分類できる。一つは裏面に布目を残すグループ、もう一つは裏面をナデで調整するグループである。これらは表1から判断する限り明確に分類できるものであり、技術的に区分できるものとみてよいだろう。本稿では、前者（布目を用いる埴仏の一群）をAグループ、後者（主にナデを用いる埴仏の一群）をBグループと仮称したい。AグループとBグループには、側面及び裏面の調整痕以外にも差異がみられる。これらのことについてグループ別に取り上げ、検討を進めたい。

①Aグループの検討

Aグループの埴仏は、今回観察した限りでは全体的に乳白色系の色調を示すものが多いようである。傾向としてはやや粗い粘土が使用され、比較的良好な焼成具合を示すものが多い。このグループの中には、番号1・6・8・12・13のように、埴仏の剥離面に布目が明瞭に残る例がある。これはBグループに見られない特徴である。この布目は、個体によっては凹凸のある剥離面に明瞭に確認できるものである。おそらく、埴仏陰刻型に粘土を詰める際、ある一定の段階で布をまいた棒状のもので粘土を押し付けたか、つめこみ面を布で覆い、その上から粘土を押し付けた工程がなされたために生じた痕跡であろう。

実際にこのような痕跡が生じるのか実験したところ、前者については、

先端がやや丸みを帯びた太い棒状のものに布をまき、その工具でゆつくりと粘土を押せば、似たような痕跡が残ることが確認できた。¹⁷⁾ 後者についても、実験の結果、似たような痕跡が生じることを確認している。また、布目がついた粘土の上から、さらに粘土を押しあてても布目が残るのかについても確認している。結果としては、ある程度の厚みがある粘土を押しあてた場合や、粘土を押しこむ力が不十分であった場合に、布目が残ることを確認した。このことから、この埴仏は画像を表すための粘土は念入りに陰刻型へ押しこまれたものの、埴面を形成する粘土が陰刻型へ押しこまれる際は、比較的丁寧さが重視されなかったとみなせよう。

ではなぜ、製作段階で布を用いて粘土を押し込んだのだろうか。現状では埴仏の画像が鮮明に出るよう陰刻型に粘土を押し込む際、手や工具に粘土が付着させないための工夫だと考えたい。実際に陰刻型を作成し、粘土を詰めて作製実験を試みたところ、陰刻型につめた粘土が手に付着して型からうかび、粘土への画像の転写がうまくいかない場合があった。これを防止するために布を用いた可能性は十分考えられる。また、画像面に粘土を押しこんだ際に、入念に粘土を押さえないと画像が不鮮明になりやすく、粘土の継ぎ目が画像面に残る場合があることも確認できた。このような事態を避けるためには、陰刻型へ一度に押しこむ粘土の厚さを薄くするか、何らかの工具を用いるなどしてより強い力で粘土を押すといった工夫が求められる。夏見庵寺のAグループに分類できる埴仏群は、布を用いることで効率よく粘土を押しこむという方法をとった製作集団によってつくられたと評価できよう。

② Bグループの検討

次にBグループについてみていきたい。Bグループに含まれる埴仏群は、今回観察した限り全体的に黒色系の色調を呈するか、表面が褐色系、裏面が黒色系を呈するものが多いようである。焼成の度合いはAグループとほぼ同程度である。このグループの中には、番号3・10にみるように、複数の胎土で埴仏が作られている例がみられる。これらはBグループの埴仏すべてにみられるものではないが、Aグループでは見られない特徴である。

図4の下二段は、表1に示した番号3の拡大写真である。この図を見ると、表面および側面と裏面とで胎土が明確に異なる様子が確認できる。表面および側面は、橙色系の色を呈する精良な胎土であるのに対し、裏面は黒色を呈する砂質の胎土である。さらに、橙色系の胎土にはほとんど砂粒が含まれないのに対し、黒色の胎土には白色砂や黒色砂が多く含まれるという違いが見られる。この違いから、番号3は二種類の胎土を用いて作られたと判断してよいだろう。

ではなぜ、このような胎土の使い分けがなされたのだろうか。土製品で複数の胎土が用いられたという事例は、須恵器の甕で報告例がある¹⁸⁾。この例では、胎土の性質の違いを利用したものと考えられているが、埴仏で同じような事情は考えがたい。むしろ、このようなことをすれば、乾燥前後で胎土の収縮の度合いに差が生じ、亀裂が入るなどの不都合が生じる可能性が高くなるはずである。よって、須恵器とは異なる理由を想定する必要があるだろう。

埴仏の表面には精良な粘土を用い、埴仏の画像を明瞭に表現している

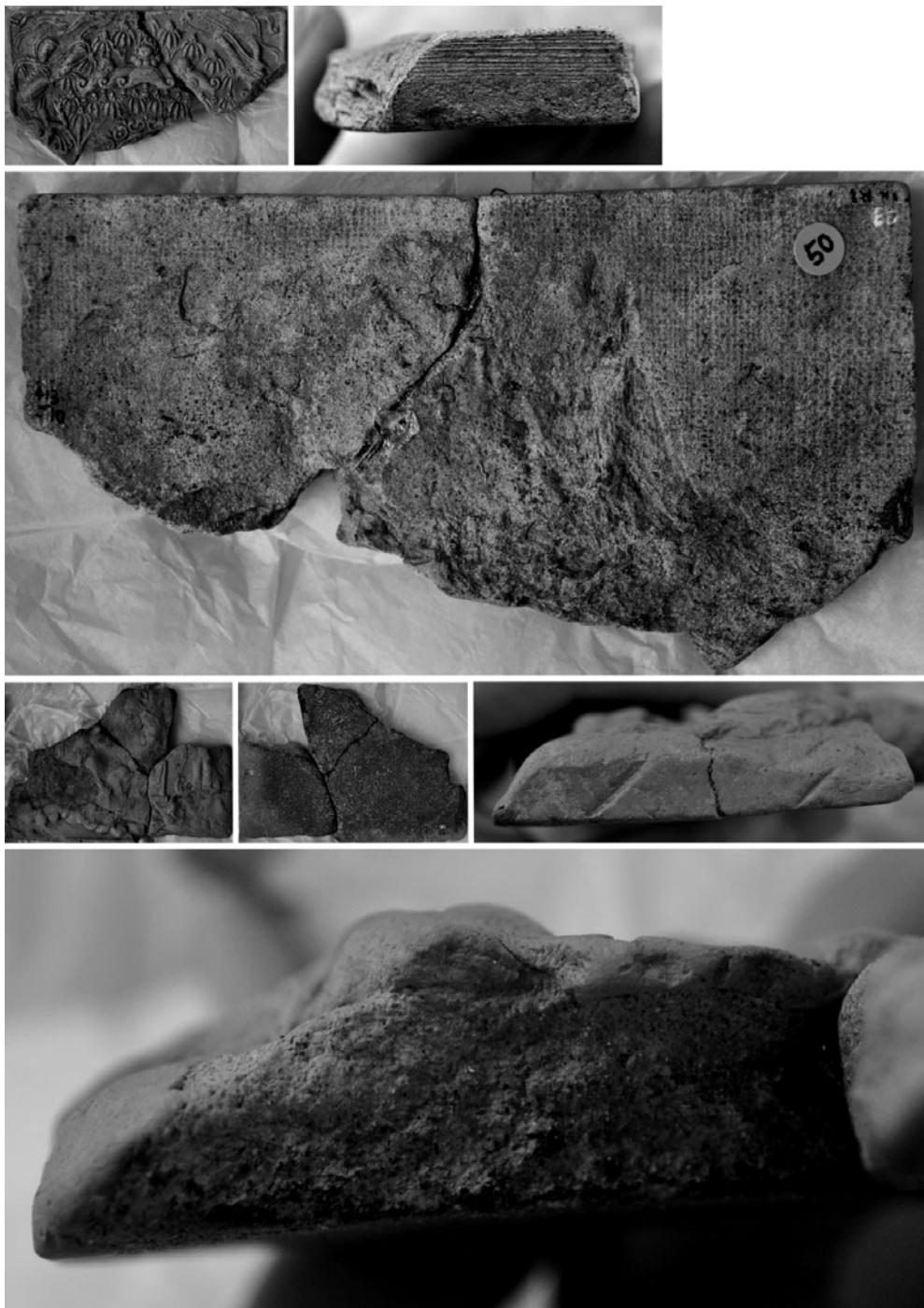


図4：AグループとBグループの差異
(上二段がAグループ、下二段がBグループ)

ことから、砂質の胎土を用いたことが埴仏の価値に影響するとは考えがたい。根拠に乏しいが、実見の限り、二種類の胎土が使用された埴仏の図像面側の胎土と他のBグループの埴仏の胎土は同じものようであった。表面だけでも胎土を共通させようとする様子を積極的に評価するならば、何らかの理由で埴仏の材料である粘土が不足するといった、不測の事態が起こった可能性が考えられる。この様子は、Aグループには確認できないことから、Bグループの方形三尊埴仏をつくる製作集団だけに何らかの問題が生じたとみるべきだろう。現状では憶測の域をでないが、今後胎土分析などによる詳細な検討をすすめる必要がある。

なお、Bグループの破断面・剥離面には布目は確認できなかった。おそらく、指で力強く粘土を詰め、図像が明瞭にできるようにしていたと思われる。

以上、夏見廃寺出土方形三尊埴仏Aについて、特に裏面に残る調整痕に注目してAグループとBグループに分類し、それぞれの製作方法などについて検討してきた。ここまでの結果から判断すれば、AグループとBグループのそれぞれの埴仏は、製作方法が技術的に異なるものと判断でき、同一の製作集団が製作したものとは考えにくい。むしろ、AグループとBグループの違いは、系統の異なる別の製作集団が方形三尊埴仏製作に関わった結果とみるべきである。夏見廃寺の埴仏作製にあたっては、少なくとも二単位の、系統の異なる製作集団が関与したとみるべきであろう。また、この異なる製作集団間には粘土を共有するなどの様子が見えなから、技術的な交流などは積極的には行われなかったと判断できる。基本的にはそれぞれの製作集団が独立して作業を行っ

ていたであろう。以下、それぞれの製作集団をAグループ製作集団、Bグループ製作集団と仮称し、さらに他の埴仏の様相について検討を続けたい。

五、夏見廃寺出土埴仏の製作集団

前章において、夏見廃寺出土方形三尊埴仏の製作には、少なくとも二単位の製作集団が関与した可能性が高いことを指摘した。では、方形三尊埴仏の製作集団は、これら以外の埴仏製作にどのように関与したのだろうか。『夏見廃寺』には、大型方形多尊埴仏、小型独尊埴仏B、小型独尊埴仏Cについて、裏面の状況が記されている。これらのデータを参考に検討したい。

まずは大型方形多尊埴仏について検討する。夏見廃寺からは、破片のため確実ではないが、大型方形多尊埴仏が少なくとも一面存在することが確認されている。『夏見廃寺』では、大型方形多尊埴仏の製作段階の痕跡として、詰め込み面に布目が残ること、裏面に布目・ナデ・ケズリが見られることが指摘されている。側面については良好な資料が少なく明らかでないが、埴仏周縁部にハケメが残る例が確認できた。これら全体の傾向から判断すると、大型方形多尊埴仏の製作集団は、Aグループ製作集団であると考える²⁰。

次に、小型独尊埴仏Bについて検討する。小型独尊埴仏Bは、夏見廃寺から二百十六点の出土が確認されている。このうち、裏面の調整痕について記載されているのは四十七点あり、これらを考察の対象としたい。

『報告書』によると、裏面が残存する小型独尊Bのうち、布目が確認できるものではなく、側面や裏面にケズリが確認できるものは四十五点、ナデが確認できるもの二点である。剥離面に布目が残る例も報告されていないため、小型独尊博仏BにはBグループの特徴しか確認できないようである。このことから判断すると、小型独尊博仏Bの製作集団は、Bグループ製作集団であったと考える。

最後に、小型独尊博仏Cについて検討する。小型独尊博仏Cは夏見廃寺から1点出土している。『夏見廃寺』によると、小型独尊博仏Cの裏面はケズリで調整されているようである。剥離面に布目は確認されていない。このことから、小型独尊博仏Cの製作集団は、Bグループ製作集団であると考えたい。

以上のように、方形三尊博仏以外の博仏についても、Aグループ製作集団、もしくはBグループ製作集団が製作していることが確認できた。ここまでの結果をまとめたものが表2である。このことから判断すれば、方形三尊博仏以外の博仏作製にあたっては、AグループとBグループの両製作集団が共働することはなかったようである。むしろ、方形三尊博仏を境とし、それより大きい博仏の作成にはAグループ製作集団が、それより小さい博仏の作成にはBグループ製作集団が主に行うような分業体制がなされていた可能性が高い。夏見廃寺で博仏を使用することが決まった段階で、複数の種類の博仏をつくることや、その製作にあたっては二単位の製作集団が作業分担することなどが計画されたのではないだろうか。そして、それぞれの製作集団がそれぞれの担当の博仏をより効率的につくることができるよう、準備していたのではないだろうか。

夏見廃寺出土博仏は、粘土を詰め込む段階に布を使用し、さらに裏面にも布をあてるAグループ製作集団と、布を用いず、ナデやケズリで調整を行うBグループ製作集団の二単位の製作集団によってつくられた。そして、この作業分担は製作の計画段階から決められており、より効率的に作業が進むように考慮されていたのではないだろうか。なお、『夏見廃寺』によれば、AグループとBグループそれぞれの方形三尊博仏で、出土場所の傾向が異なるようである。このことが示す意図については即断しかねるが、方形三尊博仏作製時においても使用場所などの分担があった可能性は考えられるだろう。なお、AグループとBグループの差は時間による差である可能性も考えられるが、どちらもある程度の数が出土していることから、補修などの可能性は低いと考える。

六、まとめ

以上、夏見廃寺出土博仏について、方形三尊博仏Aを中心に、調整痕に注目して考察を行ってきた。その結果、夏見廃寺出土博仏には少なくとも二単位の製作集団が存在していたことを指摘できた。これらの製作集団は、方形三尊博仏以外では完全な作業分担をしていたと考える。この分業体制は博仏製作開始時以前から計画されていた可能性が高い。各製作集団とも、事前に準備を行ったものと思われるが、Bグループ製作集団はその製作の途中で、材料が不足するような事態が起こったようである。しかし、そのような事態が生じた際にも寺院造営氏族やAグループ製作集団からの援助などがなかったようである。

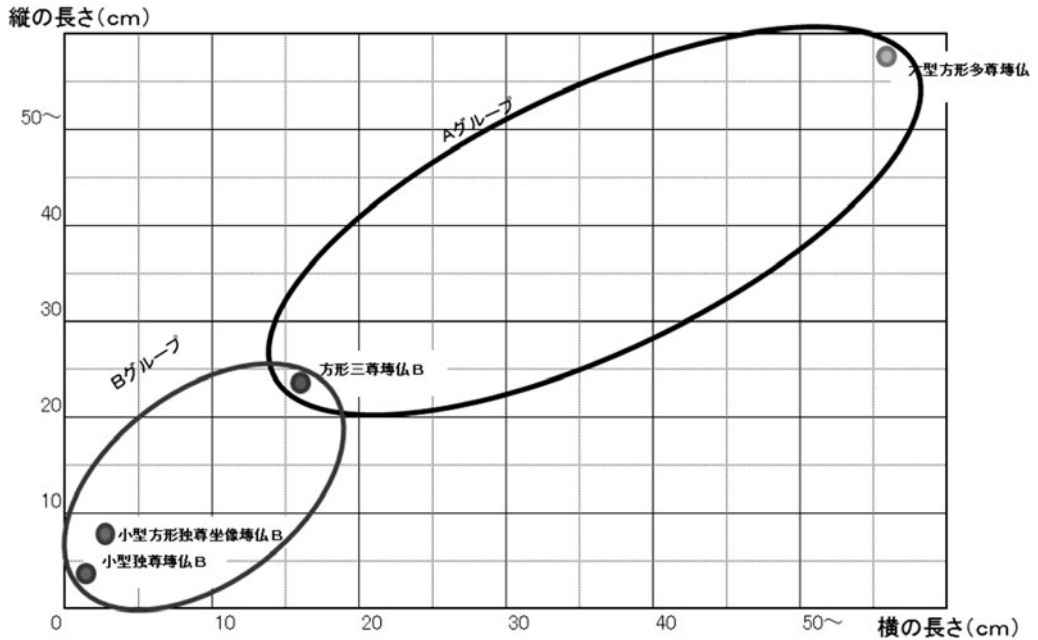


表2：埴仏と製作集団の関係

従来、埴仏は図像のみに研究が集中してきたが、図3で示したような視点に注目することで、より詳細な研究が行えることが明らかになった。表1の視点は夏見廃寺以外の遺跡から出土した埴仏においても適応できると考える。今後、遺跡間における埴仏の製作集団の移動の様相などについても検討したい。

また本稿では十六点の方形三尊埴仏の観察結果をもとに考察を行ったため、その精度に大きな問題が残る。また、製作集団の実態などについては十分に触れることができなかった。今後の課題としたい。

最後になりましたが、本稿作成にあたり、日頃からご指導いただいている米田文孝先生をはじめ、下記の方々からご指導・ご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

門田了三、近藤康司、廣岡孝信、名張市教育委員会

(敬称略)

註

- ① 埴仏の表面に金箔や漆膜、顔料が残る例が確認されている。
 - ② 高橋健自 一九〇五「埴佛像考」『考古界』5編1号
 - ③ 久野健編 一九七六『日本の美術』118押出仏と埴仏
 - ④ このような研究としては、以下のものがある。
- 石田茂作一九三五「我国発見の埴仏に就いて」『伽藍論考』岩波出版、賀川光夫一九八一「仏教美術の源流 探訪1 埴仏と塑像の東進」『史学論叢』12 別府大学史学研究会、肥田路美一九八五「唐蘇常侍所造の「印度

仏像」博仏について』『美術史研究』第22冊 早稲田大学美術史学会、浅井和春一九九七「型押の仏像——博と銅板／型押の仏像——博と銅板——」『名品でたどる——版と型の日本美術』町田市立国際版画美術館、荻原哉二〇〇二「玄奘発願十俱胝像考——「善業泥」博仏をめぐる」『仏教芸術』二六一号 思文閣出版、後藤宗俊二〇一〇「博仏の来た道——白鳳仏教受容の様相——」思文閣出版、白井陽子二〇一一「日本出土の三尊博仏——その製作のはじまり——」『考古学論叢』第34冊 奈良県立橿原考古学研究所など。

⑤ 大脇潔一九八六「博仏と押出仏の同原型資料——夏見廃寺の博仏を中心として」『MUSEUM』48巻1月号

⑥ 光森正士一九八五「博仏雑想感」『末永先生米寿記念献呈論文集』坤

⑦ 名張市教育委員会一九八八『夏見廃寺』

⑧ 名張市教育委員会の調査以前に採集されたものがあり、その総数は把握できない。

⑨ 管見の限り、博仏は全国約二一〇〇の遺跡から出土や表採の報告がなされているが、十以上の博仏が確認されている遺跡は、そのうちの十五％程度に過ぎない。

⑩ 三十cm四方より大きいものを大型、十五cm四方以下のものを小型とした。また、博仏は形状で分類がなされるため、全ての博仏の形状がわかるよう分類後の名称を改めた。

⑪ 同じ図像の博仏については、従来、互同様に同範という表現がなされてきた。しかし、博仏の陰刻型が陶製であったとするならば、陽刻型が一つあれば同じ図像をもつ陰刻型が容易に複数製作できたことになる。そのため、たとえ図像が同じ博仏があったとしても、同範といって適切かどうか、容易に判断がつかないものと考ええる。よって、本稿では同じ図像のもので

あったとしても、同範という表現は用いないこととした。

⑫ 表採資料として王子保薫、野々宮廃寺、石居廃寺、石上廃寺、青木廃寺、定林寺跡、斎尾廃寺、寒水寺、蛇円山くぐり岩例が、出土資料として大宝山廃寺、能登国分寺、夏見廃寺、天華寺廃寺、西山廃寺、正道廃寺、神雄寺跡、唐招提寺、駒婦廃寺、藤原京左京6条3坊、藤原京外周帯、川原寺跡、石光寺、掃守廃寺、二光寺廃寺、中山観音寺、九頭神廃寺、坂本寺跡、佐野廃寺、上ノ段遺跡、大御堂廃寺例が挙げられる。分布の範囲としては静岡県から広島県に至るまでの範囲となる。これは、他の博仏の分布範囲と比較すれば、広い範囲といえる。

⑬ 伝世品として法隆寺、唐招提寺例が、表採資料として藤原宮例が、出土資料として安倍寺跡、法堂寺廃寺、河内百濟寺跡、當麻寺、夏見廃寺、興福寺、二光寺廃寺、石光寺が挙げられる。なお、確認ができていないが乙訓寺からも確認されたといい、これが事実であれば十一遺跡から出土が確認されていることになる。なお、これら十一遺跡の大型方形多尊博仏を詳細に観察すると、その図像は遺跡ごとで若干様相が異なる。少なくとも、安倍寺跡、河内百濟寺跡、法堂寺廃寺、當麻寺から出土のものはすべて図像を異にしていることが確認できた。大型方形多尊博仏には大脇潔によって焼き縮みが指摘されている例がある。この焼き縮みの例が、どの博仏と同じ図像になるのかは非常に興味深い問題である。

⑭ 額田廃寺と駒婦廃寺から確認されている額田廃寺のものは表採資料である（鈴鹿市考古博物館二〇一〇『土の中に眠っていたほとけさま』など）。駒婦廃寺のものは、菟田野町、菟田野町教育委員会、奈良県教育委員会、関西大学文学部考古学研究室一九七一『奈良県宇陀郡菟田野町駒婦廃寺（伝安楽寺跡）発掘調査概要』にて報告されており、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館二〇〇七『山の神と山の仏——山岳信仰の起源をさぐる——』

では概報で紹介されなかった埴仏も掲載されている。これらの遺跡からは、異なる図像の埴仏も数点出土している。このうち、駒形廃寺からは夏見廃寺と同じ図像の方形三尊埴仏が出土しており、埴仏だけで考えれば、夏見廃寺と近い関係性がうかがえる。

⑮ 方形三尊埴仏A、B、Cすべてを含めた数である。なお、内訳としては方形三尊埴仏Aが百二十九点、方形三尊埴仏Bが十点、方形三尊埴仏Cが一点である。

⑯ 名張市教育委員会一九八八『夏見廃寺』掲載の出土遺物一覧より個数を数えた。

⑰ 棒状の工具で粘土を叩いた場合は粘土に生じる凹凸が激しくなり、夏見廃寺で実見したような形状にならなかった。

⑱ 埴仏図像面に傷が見られるような例は、現在のところ全国的にみても確認できない。陰刻型が従来の理解通り陶製であるとすれば、陰刻型に傷がつくような事態が生じた時点で、陰刻型そのものを使用することが困難になったと想定できる。おそらく、傷がつくような事態が生じた時点で、その埴仏陰刻型の使用を中止したのであろう。

⑲ 望月精司二〇〇一「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」『北陸古代土器研究』第9号、北陸古代土器研究会

⑳ 大型方形多尊埴仏については実見しており、胎土が方形三尊埴仏Aグループのものに近しいと判断している。このことから、大型方形多尊埴仏はAグループ製作集団が関与した可能性が高いといえる。

備考…図版の出典は以下のとおりである。

図1 廣岡孝信二〇〇六「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報二〇〇五年度』(第2分冊) 奈良県立橿原考古学研究所

図2 名張市教育委員会一九八八『夏見廃寺』より

図3 筆者作成

図4 筆者撮影

表1・2 筆者作成